

経済活動を支える 情報システム

数字の持つ意味に気付こう

「私は『情報システム』の研究をしています」と自己紹介をすると、「それは経済学部ではなく、理工系学部の研究分野なのでは？」と思われるかもしれません。しかし、果たしてそうでしょうか？

皆さんは「データ」ということばと「情報」ということばの違いを考えたことがありますか？——次の図を見てください。これは、天気予報でおなじみの「アメダス」の、ある観測地点で観測された 10 分おきの気象データの例です。観測地点は日本全国に約 1300 か所ありますから、このようなデータが 1 日あたり約 20 万件も発生することになります。

ところで、この「データ」を見て何か気付いたことは

宮崎 耕

Ko Miyazaki

[研究テーマ]

情報システムの研究



ありませんか？——そうです、「このままでは何の役にも立たない」ということです。なぜ役に立たないのでしょうか？——それは、このデータが「何の意味も持たない」数字の羅列にすぎないからです。

そこで、「61286 は京都地方気象台の識別番号、3 は観測種別（降

61286, 3, 8, 2, 1
1, 0, 3, 4, 5,
2, 0, 2, 4, 5,
3, 0, 2, 4, 6,
4, 0, 2, 4, 6,
5, 0, 2, 4, 6,
10, 0, 4, 4, 6,

⋮

水量、気温、風向、風速）、8、2、1 は 2008 年 2 月 1 日、続く各行は観測時分、0.1mm 単位の降水量、0.1℃単位の気温、16 方位の風向、毎秒 m の風速」という、最小限の「意味付け」をしてみると、それだけでも、「京都では雨は降っていないが、気温が低くて風もある」ことがわかり、「傘は不要だが、コートを着て出かけよう」という判断—意思決定ができます。

さらに、テレビの気象番組などでよく見られるように全国の観測地点の降水量を色分けして地図上に表示し、時間の経過とともに雨の降っている地域がどのように変化しているのかを観察すれば、たとえば、「京都市内では何時ごろから雨になりそうか」を予測する手がかりになるはずです。このように高度な意味付けをすることで、京都市内のコンビニ店などでは、「降り始めの時刻に合わせて『ビニール傘』を用意し、店頭で販売しよう」というような戦略的な意思決定につながるかもしれません。



情報システムなくして経済活動は成り立たない

このように「データに意味付けをして、意思決定に役立つようになったものが情報」なのです。そして、データに意味付けをして、情報を得るための仕組みを一般に「情報システム」と呼んでいます。「情報システム」は必ずしも「コンピュータシステム」である必要はありませんが、現代の情報化社会では、膨大なデータに基づいて、的確な意思決定を行うための高度な情報をできるだけ早く得ることが求められるため、ほとんどの情報システムはコンピュータシステムによって実現されています。

このような「情報システム」は、行政、公共サービス、交通、流通、医療、金融、物流、製造、経営、学術、教育など、さまざまな分野に導入されていて、もはや私たちの生活に欠くことのできないものになっています。そして注目すべきことは、情報システムの適用対象はほとんどが経済活動にかかわるものだということです。

情報が生きるも死ぬも使い手次第

経済学部で情報システムを研究することの必然性に気付いていただけたでしょうか？ — どのような意思決定が必要なのか？その意思決定のために必要な情報は何か？その情報を得るために情報システムにはどのような機能が求められるのか？その情報システムが必要とするデータは何か？情報システムを実現する際にどのような情報技術 — ICT が利用できるのか？ — 有用な情報システムを実現するためには、その適用対象である経

経済活動そのものに造詣のある者が、同時に、利用可能な情報技術について熟知していることが極めて重要なのです——情報システムをコンピュータシステム上に構築するための技術開発を研究の中心的テーマとする理工系学部とは、スタンスが大きく異なるということです。

